

アルパック ニュースレター

迎 春

平成9年元旦



下北山村に「きなりの湯」がオープンしました（本文中に関連記事があります）

アルパック ニュースレター もくじ

1997年1月1日

- あけましておめでとうございます…………… 2
- 「きなりの郷の物語」…………… 5
- 京都の住民主体のまちづくり活動の概要…………… 8
- 沿岸域研究と海外調査……………10
- 展望アンケート報告—その1……………12
- 提案の検証と自己改革をめざす……………13
- “デカンショで暮らし隊”で探しあてた宝もの……………14
- 木が動く!?!……………15
- アルパックプラネット6号を発行しました……………16
- 新刊旧刊書評紹介……………17
- まちかど……………18

NO.81

あけましておめでとうございます。

変曲点通過過程の仕上げ期
アルパック新創業元年

取締役会長 三輪 泰司

天下大乱の時代と見たのが1989年初。以来世界的な歴史の変曲点通過の時期にどのようなことが起こるか、見させていただきました。変革期特有の能力低下

すっかり“価値観”は変わりました。こんにち誰でもどこでも“地域に根ざして”とか“市民本位の”といます。“地球環境”とか“共生”は決まり文句です。誰がいいだしたのでしょうか。世代も変わりました。

価値観の転換とは、一種の思想革命。その後の新しい時代に差し掛かっているはずですが、練達の戦士がいなくなり、新しい計画思想による建設はまだ五里霧中。“政”もさることながら“学”も“官”もそしてシンクタンク、コンサルタント、設計事務所の世界でも哲学が問われているのではないのでしょうか。いまこそ不易の道が輝く

旧世代は縮こまり、若い世代のほうが現状にしがみつき、ものごとを見抜く目が弱まり、知らないとはいえ依然として“美しい地獄”を造っているのではないのでしょうか。

アルパックも例外ではないのですが、ありがたいことに、ボランティアズムを教えて頂く方々、インターナショナルリティを実践し、コミュニケーションこそ創造の源泉であると実行する世代、戦闘的で且つ、長所のすぐ裏が弱点と心得ている経営陣が育っています。

変わらないことは、日本とは、日本人とは、アルパックとは、自分とは、アイデンティティを求めること。今年是新創業を記念し「アルパック文化」の光を輝かせたいと思います。

地域の振興をプロモートする
役割を發揮します

代表取締役社長 金井 萬造

去年は諸情勢の厳しい中で皆様方の絶大なご支援のもとで経営を進めてこれましたことに心からお礼申し上げます。

アルパックは、本年2月に創立30周年記念を迎え31周年目に入ります。これを機に、全所員が今までのストックを総点検すると共にコンサルタントの原点を再認識、再確認したいと思っています。さらに、今までの成果の上に立ってゼロからの出発をすべく新たな決意であります。

まず、現実起こっている地域の問題、課題に対して、全所員が一致協力して今まで蓄積してきたコンサルタントとしての技術やノウハウを大いに活かし解決に当たりたいと思います。それには、情熱を持ち、まちを愛し、何よりも地域の人々や関係機関の気持ちを大切にすることが大切です。今年も地域に対し心からホスピタリティを發揮して事態のよい方向への展開を促進することに貢献したいと念じております。

これらのことができてはじめて、コンサルタントの存在価値が確認されると痛感しています。言うことは易しくとも着実な前進は難しいものです。全所員の知恵と工夫を出し合い、所外の方々とも連携させていただき、地域の振興をプロモートする役割を發揮したいと思っています。

さて、昨年11月に新しい若手の役員6名を選任いたしました。若手、中堅所員と連携してより一層努力してまいりたいと思っています。今年も旧来に変わらず皆様のご批判、ご理解、ご支援をよろしく願いいたします。

今年もよろしくお願い致します。

近畿内陸地域の明日をさぐる

京都事務所長 山口 繁雄

昨年末、ようやく新しい全国総合開発計画の中間報告が発表されました。

報告では、国土をめぐる諸状況が大きな転換期を迎え、それに対応する国土計画が求められているとして、国土構造を東京を頂点とする都市間の階層型構造から水平的なネットワーク型へ転換することを基本方針としています。

地方分権がどの程度進められるのか、また進むのかはまだ不明ですが、東京一極集中型の構造が行き詰まってきているという認識は一般化してきたようです。いよいよ各地域のビジョンを本気で語らなければならない時代が到来したという感じがします。

しかし、「東京からみると地方の将来が見えない」という話を伺ったこともあります。明治維新以来、徹底的な中央集権的な国土づくりを行ってきた我が国としては、仕方のない話なのかもしれません。

そうした中で、京都は、日本の中の「外国」になりつつあるという方もおられます。確かに京都は安易な「リトル東京化」を徹底的に嫌って、追随することをしてきませんでした。このため、我が国固有の歴史と文化を蓄積する京都は、報告がいうところの「地球時代における日本の顔」を代表する地域として、浮上しつつあるように思います。

西洋化の進んだ近代社会の中で、東洋文化に立脚し、適度に西洋文化を消化してきた京都の「知恵」を学び、新しい豊かな生活文化を模索していきたいと考えています。

本年もよろしくお願い致します。

ひと、まち、地域がさらに輝く年に

大阪事務所長 杉原 五郎

96年もあわただしく過ぎ去り、新しい97年を迎えました。96年を個人的に振り返ると、学研都市セカンドステージプランの策定、近畿大学非常勤講師、ニューヨーク・ワシントンNPO調査、阪神・淡路まちづくり支援機構の創設、韓国・シンガポール・タイ沿岸域調査、関西まちづくりフォーラム、大阪府木造密集市街地問題への取り組みなど、盛りだくさんの1年でした。大阪事務所としても、新人4名と本社スタッフを含めて42名の陣容となり、幅広い分野と広範な地域を舞台に活発な業務活動を展開することができました。

さて、97年はどのような年になるのでしょうか。私は、人間の存在というものを基本のところから問い直す1年にしたいと思います。

人間社会は、有史以来、おとこ（男）とおんな（女）から成り立って来ました。男がいて女がいて、結婚して子供が生まれ、子供を産んだ親は、自らとその子供たちを食わすために必死に働き、子供は成長して大人になり、そして子供を産み、子供の親は年老いてやがて一生を全うする。この繰り返しは人類の歴史でした。このような人間としての営みは、これからも永続的に続くでしょう。また、この地球とともに人類が持続的に生き続けていけるようにしなければなりません。

私は、人間と人間の営みについてさらに深い思いをもって仕事に取り組んでいきたいと思っています。アルバック大阪事務所も、ひと、まち、地域のこれからがますます輝くように、日々の業務と幅広い社会活動を通じて、一生懸命努力していきたいと考えています。本年も、よろしくお願い致します。

あけましておめでとうございます。

新たな地域創造の年を

名古屋事務所長 尾関 利勝

未来に向かう明るい社会の到来が殊のほか望まれる昨年でした。日本が近代 130年を超えて成熟社会に向かう中で、パラダイムの転換が必要なこと、そして何より自らの改革の必要性をつくづく実感させられた年でもありました。

アルパック名古屋は昨年12月2日より、設立15年を期し、自己改革の第一歩として私どもが信託方式を核とする基本計画を提案したナディアパークのビジネスセンターに拠点を移し、所員一同、心新たに地域の未来づくりに貢献すべく、時代性・地域性・具体性のある業務推進に努力するとともに、志を同じくする様々な方々とのグローバル・ネットワーキングを一層強化していく所存です。

事務所移転は、今後の計画立案に資するため、自らの計画提案の実現後を検証すること、同時に複数階に分散した事務所スペースの統合化を兼ね、多少経済条件は背伸びをしましたが、あえて移転を決断致しました。

従来から、アルパック都市交流サロンとしてご利用頂いている会議室を今後も地域のネットワーキング活動に資するべく、若干のスペース拡張と機能充実を行いました。

私どもの活動に対し、ご指導いただきました皆様に厚く感謝するとともに、転換期の時代を生き抜く地域創造をめざし、新生アルパック名古屋の自覚のもと、地域の皆様方とのネットワークを強めつつ、一層の努力を続けていく所存です。本年も、旧来に変わらずご指導ご支援のほどお願い申し上げます。

共生と連携への対応の時代

東京事務所長 小林 佑造

昨年は、業務をはじめとして私どもに貴重な機会と場をいただき、地域計画から建築までというアルパックの一番おもとのスタンスを実現できるようになりましたことは、ひとえに皆さんのお引き立て、ご援助の賜と紙面で失礼ながら厚くお礼申し上げます。

秋が深まってくると事務所前の新宿御苑に早朝霧がたち込め雲海のように樹木の頭部を残し、遠景の東京タワーや高層ビルがシルエットとして浮かび上がり、こんなに美味しいのかと思える冷たい空気がたち込め、朝日と共に霧が晴れその下から紅葉した赤や黄色の葉が現れる様は一時みとれてしまう程でした。

第5期全国総合開発計画では、将来の人口減少や高齢化社会を想定し、これまでの開発・ハード偏重から、自然との共存や地域の国際化などソフト中心への大変換を求め、経済重視から自然との共生へ、国土軸の一軸集中ではない多軸の相互連携へ、国指導でない地域住民の参加と連携の方向を示しているとのことです。一方では、これまでの計画の積み残し施策や、都市機能のフルセット整備を求める声もあることから実際の地域づくりに即反映されるまでには時間がかかるものの、『共生と連携』を中心においた時代になってきていることだと思えます。

福祉は「近隣の人たちに対して自分に何ができるかを自らに問いかけることから始まる」と言います。自然と人工が親和した環境システムを組み立てる難しい問題に今年も所員一同取り組んでいきたいと考えております。本年も引き続きご指導ご協力お願い申し上げます。

今年もよろしくお願ひ致します。

引っ越しから新たなスタート
九州事務所・(株)九州地域計画研究所
副所長 山田 龍雄

あけましておめでとうございます。本年も
よろしくお願ひします。

昨年、小生が感じました印象に残っている
話を述べて、新年のあいさつとさせていただきます。

○全国の地方をキャラバン隊を組み和製ミュー
ジカル劇を演じている「ふるさとキャラバ
ン隊」の「パパは家族の用心棒」の中でのせ
りふ：『国などあてにならない、自分たちの
町だけが生き残れる町をつくろう。』

まちづくりは住民参加でもっと地域エゴに
徹しても良いのかも知れない。

○昭和40年に「保護より働く機会を」をモッ
トに運営され、障害者の雇用やりハビリの
拠点となっている「別府・太陽の家」のホン
ダ・太陽の鈴木専務のお話：『障害者の方も
授産施設より各企業内の作業所で訓練した方
が、技術が向上するんですよ。』

障害者、健常者関係なくチャレンジ精神や
向上心が発揮できる環境をつくっていくこと
が大切と感じた次第。

弊社は会議室が別階にあったため使いにく
く、お客さんへのサービスもいきとどかない
面があったため、昨年8月に事務所を移転し、
ワンフロアとしました。引っ越しを機会に新
たなスタートを切りたいと思っています。

福岡に來られました折りに是非お立ち寄
り下さい。

「きなりの郷の物語」

下北山村に「きなりの湯」がオープンしました

高坂 憲治

「今日も南から黒潮の潮風が私の体をやさ
しく通り過ぎる。もう、どれくらい時があつ
たのか。私の全身を覆う幾重にもかさなつた
広葉の葉はすっかり色づき、私の体を黄金色
に染めている。小さなリスや昆虫たちが冬支
度に忙しく私の足元から実を拾って巣に帰つ
ていく。私は、そう、二千年は生きていた
らうか、栃の古木である。」「ここ下北山の
山々は、人間が自分達の魂と神との邂逅の場
として大切にしていたところだ。…(中略)
…私は、この村が未来に向けて自立と独創の
魅力的なふるさととして生きてゆくためには、
このような無限の価値(資源)を活かした村
づくりをすべきだと、常々思っている。つま
り、自然や人間という無限の価値を活かした、
「きなりの村」づくりだ。」

(下北山村総合計画1994基本構想より)

いくつもの峠を越え、橋を渡り、数えきれ
ないほどのカーブのある曲がりくねつた道
を通り過ぎて通う下北山村は、村木である栃
の木が語る「きなりの郷の物語」を育む奈良
県吉野郡の山間の村である。

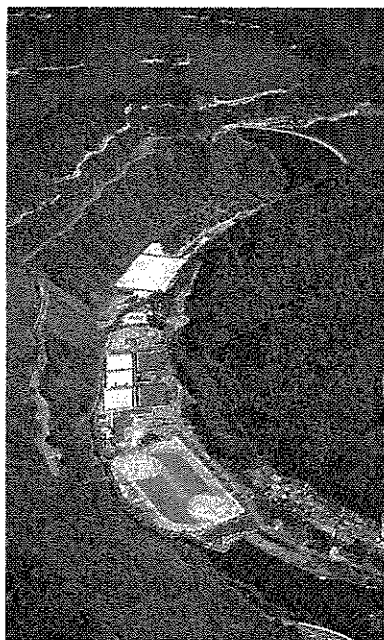
「吉野」とはいうものの、国道169号を吉野
川(紀ノ川の上流)に沿って遡り、やがて
「近畿の屋根」といわれ日本有数の雨の恵み
を誇る大台ヶ原や伯母峰山脈の中腹にある新
伯母ヶ峰トンネルを抜けると、筏下りや瀕峽
で知られる北山川に水系をかえて熊野灘へ僅
か35kmと迫る。このあたりは太平洋の潮の香
漂うような不思議な山里なのである。

人口は約1,500人、65歳以上の高齢者比率は
約30%、長い間この村の人を見つめてきた
栃の古木ですら、2003年(平成15年)には人口
約1,300人、高齢者比率は44%と予測する。

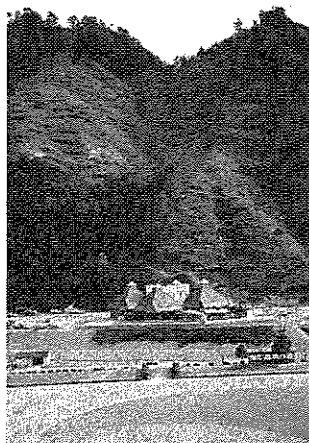
しかし、この村の民はこの現実に立ち向かうため「きなりの郷」を高らかに宣言した。めざすのは元気・本気の人気村づくり、すなわち健康で生き生きした「元気」と、しっかり生きる「本気」と、出会いとときめきの「人気」のある下北山である。「きなりの郷の物語」は村民が共有する村づくりのシナリオなのである。

この村の北山川をせき止め、揚水発電のための池原ダムが建設され、その堰堤の下流河川敷が総合スポーツ公園として開発された。

スポーツ、キャンプ、川遊び、釣りの他、春の桜祭りに始まり、夏祭り、山の音楽祭、秋祭り、冬の突進鍋（しし鍋）祭り等多彩なイベントできなりの民は暖かいもてなしと交流を続けてきた。そして、このスポーツ公園のグラウンドの一隅に温泉が湧出した。夏を中心として釣りやキャンプ、スポーツ合宿で賑わう下北山も冬になると静かな村となる。賑やかなことが好きなきなりの民にとって、温泉は冬も暖かくもてなすことができる資源として大いに期待された。



スポーツ公園（上が池原ダム）



山に呼応する「きなりの湯」



前鬼不動七重の滝

1994年11月中旬、紅葉が美しい吉野路を通過して下北山を初めて訪れ、村長さんや助役さんはじめ村役場の方々にお目にかかって「きなりの郷の物語」を聞いたときにこの温泉保養施設のコンセプトは構成された。

村民自身が心身のリフレッシュを図り、交流して元気・本気の力の源を得ること、そして「きなりの郷」を訪れる人々を暖かくもてなし、心の通った交流を続ける拠点とすること、すなわち「きなりの湯」である。

1ヶ月後、提案書とスケッチをもって再び「きなりの郷」を訪れた。

平面は村の花である「カワツツジ」の花をモチーフとして5枚の花びらを組み合わせ、屋根は周囲の山の勾配を取り入れたものとした。浴室や露天風呂、ロビーから眼前の雄大な山を見上げられるように平面に角度をもたせ、露天風呂の塀の高さを微妙に調節した。裸で入る浴室はいわば無防備な状態の人間がリラックスするためのものであるから、雄大な風景をそのまま内部に取り込めるように、また風景を鋭く切り裂くようなサッシュの線を排除するために自然換気の方法を工夫し、サッシュの色についても吟味した。

浴室は、1つは多重浴を楽しみ、1つは徹底してきなりの湯を楽しむシンプルなものと



村内の石

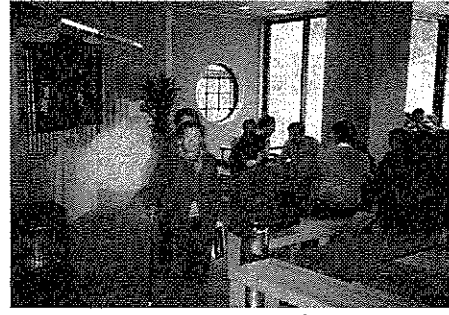
して日替わりで男女を替えるようにした。脱衣室はお年寄りが楽に着替えられるように大きくゆったりとさせた。露天風呂にはこの村の山に見られる奇岩や、神秘的で豪快な「前鬼不動七重の滝」を写した。そして、きなりの郷の4つの物語と老若男女全ての村民が輝く様を象徴するように4本の光の塔を立てた。だから4つの塔は高さが少しずつ違うのだが、これに気づく人はほとんどいない。それでも夜ともなれば169号を通る人にこの村の輝きは届くはずだ。

しかし「きなりの湯」で一番伝えたいこと、それはこの温泉が計画から設計そして工事に至るまで、「生(き)」であることにこだわり続ける下北山村民の心が持続し徹底していたことである。

当初提案した浴槽メニューとしての薬湯は「生の温泉」でもてなしを徹底するために却下された。内装にふんだんに用いられた木は、村民の思いを込めて桧とし、手が触れる範囲を除いて塗装は行わず無垢のままとされた。



檜の湯



オープンの日ロビー

露天風呂には下北山の奇岩を模して多くの石が使用されたが、それらの多くは西脇村長さんと村内の谷から谷へと探して歩いた下北山の石である。

浴槽からスノコまで檜の木で造った浴室の檜は、この村に育った樹齢約100年の檜の木である。一寸五分の板に挽き、自然の中で3年間じっくり寝かしてあった「きなりの逸品」である。当時村議会議長(現温泉特別委員長)であった後岡さんから「これを使ってやってくれ」と頂いた。

そして、完成間近のある日、現場に村の議員さんの1人が幾苗かの植物を抱えてやって来られた。「露天風呂の庭に植えて欲しい」といって差し出されたのはこの村に縁の植物だったと造園の職人達が話してくれた。

「きなり」とは、それぞれがもてるもの全てを出し尽くした上での「自然」「そのまま」であること。その意味で「きなりの湯」は、村民から施工まで全てが「きなり」だったのである。(大阪事務所 こうさか けんじ)



奈良県の「湯の香美人」(オープンの日)

京都の住民主体のまちづくり活動の概要

石本 幸良

はじめに

京都の住民主体のまちづくり活動に関わって20年が経過しました。活動の目的や内容は変化していませんが、最近では私自身の捉え方に変化が生じています。私のまちづくり活動へのスタンスの総括も含めて京都のまちづくり活動の一端を紹介させていただきます。

市内の住民主体の活動の多さと多様性

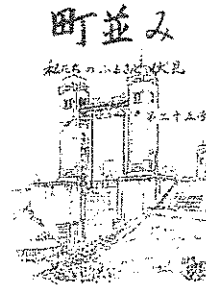
京都市内で展開されている住民主体の様々な活動は町内会や自治会の日常的な活動から、町並み保全やマンション反対運動、環境保全、福祉分野など、非常に多岐にわたり、また、その活動の数の多さに驚かされます。

しかし、その活動内容はあまり紹介されていませんし、活動相互の連携もあまり行われていないのが現状です。ネットワークづくりと盛んに言われ、私も先進事例との交流の必要性を提案するのですが、結局の所はマイペースを守るのが京都の活動です。すでに人や地域のつながりが脈々としてできあがっていることや、他人の家の中まで干渉しない京都人気質のせいでしょうか。

また、住民の活動と行政の協調、連携といった点も弱いように思えます。うまく噛み合えば、もっと違った展開や京都のまちづくりが進むように思えてなりません。

伏見の活動の15年間

私と伏見の関わりは学生時代からですが、「伏見のまちづくりをかんがえる研究会」はすでに15年を越える長期にわたり、酒蔵と町家に代表される伏見の町並みの保全に向けていろいろな活動を続けてきました。さすがにこの数年は活動自体は低調となっていますが、



伏見の町並み誌

この伏見の活動を支えたのは主婦パワーであり、メンバーのバランス感覚のよさ、そして町並みへの愛着の賜物と言えます。

酒蔵の再利用を目指してのコンサートや結婚式などの実施、全国町並みゼミとの連携による町並み保全の活動や伏見の情報を通じて世界との交流、加えて町並み誌の発行はすでに25号に至っています。近年、伏見の町では町並みと調和する事例が増えていますが、会の長期にわたる活動の継続が無言の形で町並みのご意見番のような役割を果たしていることも一因と感じています。

姉小路界隈での取り組み

姉小路界隈を考える会の取り組みはようやく1年を迎えたばかりですが、本当に京都らしい活動の展開事例です。発端はマンション反対運動ですが、姉小路通だけでなく、縦通りの住民にも広く参加を呼びかけるため、会の名称を決めるとき、「界隈」と名付けました。現在、東は河原町通、西は烏丸通、北は御池通、南は三条通の範囲を対象としており、会員数は100世帯を越えています。

会の活動としてはタウンウォッチングによる界隈の再発見、講師による例会、会報の発行と一般的な形を実践していますが、その内容が多少他の事例とは異なります。この界隈

は老舗が多く集まったところで、講師にその老舗の方を呼んで京都の文化の神髄に触れることから始めました。京料理、日本画の絵の具の話、箱師の方、京町家にお住まいの方など。また、名だたる書家の手による古い看板も数多く見られ、看板も一つのキーワードとしています。その内容を紹介した会報は読み物風に仕上げ、4号まで発行しました。2年目の総会ではワークショップによるまちづくりビジョンゲームにも取り組みました。

会ではまず会員の方々が楽しみながら、交流を深めることに力点を置いて取り組んでいます。会に出席する度毎に京都の町の奥深さに接する思いで、界隈の「町」と「人」の中に蓄積された歴史の重みを感じます。

このような界限発見と交流活動の一方で、具体的な展開も考えています。御池通と三条通が表の通りとして企業主体の顔となっているのに対し、一本裏ですが、京都の歴史と文化を体感できる「人」のスケール感のまち、住と生業（なりわい）がいつまでも受け継がれるまちづくりを願っています。

ワークショップ方式の導入

市内で展開されている様々な活動で、最近ワークショップの取り組みが増えています。公園づくりやコーポラティブ住宅などで先進的、本格的な取り組みが行われていますが、姉小路界隈でも会員の町に対する認識を共有する意味から、体験を含めて導入しています。

また、昨年8月からお手伝いしています崇

仁地区のまちづくりでも町の再発見や課題に対する認識の差を確認する意味で、ワークショップ方式を導入していますが、委員の人からはこれまで意見が言えなかったが、この方式で自由に発言できると好評です。

みんなが参加でき、さまざまな立場や考えの人が互いの違いを認識しつつ、新しい解を見つけようとするこの方式はとても有効な手法であり、いろいろな活動で展開が膨らむものと感じています。

京都の活動のこれから

京都での住民主体の活動の経験の中で、時折り都人の持つ排他性を垣間見ることもありますが、住民の方の見識の深さに驚かされませぬ。歴史の中で培われてきた「町衆」の力でしょうか、はんなりとした表現ですが、個々の方がまちに対して明快な考えをお持ちです。

現在、京都には停滞感が漂う反面、住民の活動はある面ではじっくりと取り組まれる状況です。戦後の規制型の都市計画手法の時代は終わり、想像型の都市づくりへの転換が求められる時代の中で、住民主体のまちづくり活動の今後は地域の歴史と人に裏付けされ、社会の動向に振り回されない独自性と想像性の取り組みが求められるでしょう。その意味で京都の展開は潜在力を秘めていると感じています。私自身としてはさらなる積極的な参加と京都の情報の発信の役割を果たして行きたいと考えています。

(京都事務所 いしもと ゆきよし)



姉小路界隈でのワークショップ



姉小路界隈の会報

沿岸域研究と海外調査

杉原 五郎

恵比寿ガーデンプレイスタワー34F

「壮大な研究テーマで、意欲は大いに買いますが、ちゃんとまとまりますか。」

N I R A（総合研究開発機構）のN理事は、開口一番このように切り出されました。96年7月にスタートした「持続的発展の視点に立った大都市圏沿岸域の環境保全創造システムに関する研究」（N I R A助成研究）の中間報告を昨年12月初旬に行ったときのことです。場所は、東京の恵比寿ガーデンプレイスタワー34Fの会議室。アルバックからは、私と竹野潔、原田弘之の3名、相手は、理事3名、部長等5名の計8名。予想された質問ではありませんでしたが、いきなりのカウンターパンチに正直言って少しよろけそうになりました。

N I R Aの研究助成公募にチャレンジ

N I R Aが毎年公募している助成研究にいつか応募してみようかという気持ちになり、5月の連休を利用して研究提案書を作成しました。テーマは、「大都市圏沿岸域の環境保全創造システムに関する研究」としました。ちなみに私自身は、85年以来、都市環境研究会という自主研究グループで沿岸域管理とウォーターフロントをテーマに研究活動を行ってきており、これまでに2冊の書物を共同執筆しました。また、94年度には、大阪湾ベイエリアを対象に環境保全創造のあり方について調査研究を行っています。これらの実績を踏まえて、研究テーマを設定したわけです。研究代表者には、大阪大学の盛岡先生になって頂き、(財)大阪湾ベイエリア開発推進機構にもご協力を得ることになりました。

採用されるかどうか自信はなかったのです

が、6月の末になって採用の通知を頂いたときには本当にうれしかったです。学研都市のセカンドステージプランの中で、わが国の学術研究活動を活性化するには公募型研究プロジェクトがぜひとも必要なだと報告書に書き込みましたが、現実に研究提案書が認められて公募型研究の資金を頂けることになり、喜びを実感したわけです。しかし同時に、7月に研究をスタートして翌年1月には研究レポートをまとめあげるというかなりハードな研究計画書を作成することになって、これはえらいことになったぞと、気を引き締めた次第です。

韓国、シンガポール、タイ沿岸域調査

この研究のハイライトは、東南アジア主要国の沿岸域調査にあります。5月の企画提案書において、韓国、シンガポール、タイの3ヶ国について沿岸域調査を行うことを提案し、予算書にもしっかり経費の詳細な見積りを書いていましたので、やめるわけにはいきません。アメリカでの海外調査については、「沿岸域」「都市経済」「NPO」などをテーマに数回独自の調査を経験していましたから、ヒアリング先のアポイントのとり方や言葉の問題など調査の進め方についてはある程度自信はありました。しかし、東南アジアについては、シンガポールを除いて、隣国の韓国についても、タイについても、基本的な情報すらほとんど持ち合わせていない状況で、いろいろ苦勞することになりました。

韓国調査では、大阪大学で工学博士の学位をとり、アルバックの大阪事務所で1年間研修していたヤンさんが、96年の春に京畿道の

研究開発院（シンクタンク）に就職していたため、その力を全面的に借りることになりました。韓国政府海洋水産部の海洋水産研究所と昌原大学のカン教授へのヒアリング、仁川市臨海部、始華地区、馬山地区、西釜山地区への視察、さらには、ハングル語と日本語との通訳などにおいて、ヤンさんには本当にお世話になり、韓国の沿岸域管理に係る情報の入手や意見交換の面で大いに助かりました。

シンガポール調査については、直接FAXによってシンガポール政府の関係行政機関にアクセスしコンタクトをとりました。都市再開発庁（URA）の広報担当の女性から基本的な説明を受け、公園レクリエーション部の職員の案内でイーストパークなどシンガポールの都心に近い沿岸域を視察することができました。

タイ調査については、岐阜大学の森杉先生がアジア工科大学（A I T）に客員教授として赴任されていることを知り、森杉先生を頼りに、タイでの人的つながりを模索するところから現地調査の方法を検討しました。まず、A I Tのシュバット教授がタイの沿岸域のことに関心を持っておられるということで、ヒアリング依頼のFAXを9月はじめに送りました。シュバット教授とは9月末にやっと連絡がとれて情報交換する約束をとりつけることができましたが、タイ政府の方は、2つの機関宛にFAXを送ったもののなかなかOKの返事が来なくてじりじりしました。最終的に、科学技術環境省の関係部局の責任者とヒアリングの約束ができたのは、調査の約2週間前の10月初旬でした。タイでは、東部臨海部のレームチャバン地区とマーブタプット地区も視察しましたが、この件では、森杉先生からA I Tの車と運転手を手配して頂きたいへんお世話になりました。

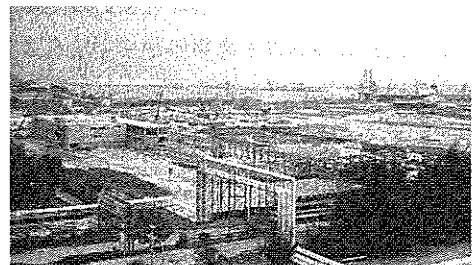
大都市圏沿岸域の環境保全創造システムに関する政策の提案

現在、研究期間があとわずかになりつつありますが、大都市圏沿岸域において環境保全創造の取り組みを推進していく上でわが国政府は何をなすべきか、という角度から政策提案をまとめるのに必死になっています。具体的には、いまのところ3つの提案の柱を設定しています。第1は、アジア・パシフィック・リレーションシップに基づいて、沿岸域の環境保全創造のための国際的な情報交流と技術移転のシステムを確立していくという政策です。第2は、沿岸域の豊かで多様な自然環境、生態環境、文化環境を維持し復元するための、日本型ミティゲーションシステムを構築していくという政策です。第3は、現在大阪湾ベイエリアで進められている「なぎさ海道」プロジェクトのように、行政、産業界、学界、市民など広範な連携により環境保全創造の取り組みを推進していくための広域連携システムに関する政策です。

ちゃんとした政策提案としてまとまるのかどうか、現段階では本当にこころもとない状況にありますが、N I R AのN理事の言葉を励みに研究スタッフ3名の力を合わせて頑張りたいと思います。

「こうなったら、途中でやめるわけにはいきませんよ。いい研究成果がまとまることを期待しています。」

（大阪事務所 すぎはら ごろう）



開発が進むマーブタプット地区

展望アンケート報告—その1

～これからの社会はどのように変わるか～

馬場 正哲

昨年、アルパック創立30周年の企画として次のアルパックを模索する「展望アンケート」を、ニュースレター読者の方に任意にお願いし、169名の方からご回答をいただきました。様々な角度からの貴重なご意見は、アルパックの宝としてだけでなく、色々な面で活かして行きたいと思っております。

断片的なフレーズでなく文脈を把握せよとのお叱りをはじめ、多種多様なご意見をいただいております。その内、「これからの社会はどのように変わるのか」の回答について概略を紹介いたします。

心配は高齢化と環境問題、そして財政難

社会の変化に対する最も重要で留意すべき現象のキーワードの回答は、グローバル化、国際化、高度情報化とともに、高齢・少子化の中、地球規模の環境汚染、産業の空洞化、低成長、財政難などに集中しました。多難の時代を背景に、高失業率と多犯罪社会が出現、国際環境は気位の高いアジアの孤児を予感させ、明治以来の体制が崩壊寸前で政官財いざずれも自信喪失の時代となっているなど、変革期の混迷の中、悲観的な指摘が先行します。

社会システムの硬直化が限界に達する

問題に的確に対応しきれない現状維持状況、社会正義への無関心、倫理の欠如、その延長でイメージされるのが、訴訟社会のギスギスした人間社会の到来や悪平等からの若者の競争心の喪失による「日本病」などが心配。一方、産業・文化・生活の進展は、全国画一ではやっていけない状態に至る。

成熟社会という展望とカタストロフへの悲観が混在する中、ついに、社会システムの硬直化が限界に達するとの指摘です。

共生と分権化へブレークスルー

展望面で、最もご指摘の多かったのは「住民参加」の進展と「協調社会」の到来です。

価値観の転換や環境創造社会の創出の中、人と人・環境・空間・時間、家族と他家族との「共生の時代」の到来が指摘されています。

また、高度情報化やグローバル化などを背景に地域間ネットワーク（地球市民の重層的な交流ネットワーク、広域連携、都市と農村の連携など）の進展が協調社会を育み、地方分権化や小さな政府の具体化の中、公民協調の、住民参加による政策形成や地域・国土づくりが広まってくる。一方で、このことが決断実行の緩慢に繋がることの危惧もあります。

生産中心主義から生活中心主義へ移行

これらの変化の文脈的な指摘は、フォーディズム社会（生産中心主義）からアプレフォーディズム社会（生活中心主義）へのシフト、テクノクラート重視から創造性豊かな人間重視へなどで、新しい価値観の創造の必要性が説かれています。その一つに、言うべきは言う、個の確立、日本の美意識形成を挙げる意見が示唆的です。

そのほか列記しますと、地域づくりでのポストモタリゼーションをどう実践プログラムに取り組めるか、産業の空洞化・低成長・財政難の下で福祉社会を構築して行かなければならない時代、そして、人類は発達発展する宿命にあり問題解決は可能、人口減少期（2020年）までに備えよ、など、次代の課題と展望が提示されています。

今回のご指摘を熟慮し、今後の仕事に活かす決意を新たにしていく次第です。

（大阪事務所 ばば まさあき）

提案の検証と自己改革をめざす 名古屋事務所の移転

尾関 利勝

アルバック名古屋は当社が基本計画を提案したナディアパーク・ビジネスセンターに昨年末より移転しました。自ら提案した完成後の検証、分散した事務所スペースの統合と環境改善とともに、事務所設立15年を期し新生アルバックへの革新の第一歩をめざします。

開館後の集客でナディア効果現象

栄交差点から西南約 500m、南大津通から一筋西の中央高校跡地を名古屋市計画局が開発主体となり、三セクの（株）国際デザインセンターと名古屋市青少年文化センターによる公共棟と、ロフトやオフィスの入る民間棟で構成された複合再開発で、民間棟は土地信託事業を採用、全体を事業コンペにより三菱信託銀行を中心とするグループが受託、昨年11月15日に民間棟とデザインセンターが、12月2日に青少年文化センターが開館しました。1カ月後でも入場制限が続くほど人が集まり、周辺百貨店の売上げが30%以上増加し、周辺飲食店に待ち行列ができるなどの波及が「ナディア効果」と言われています。

都心活性化のネライは裏宅地の活用

この基本計画を私どもが担当、都心・栄と当該地の立地条件をもとに、周辺各地区との関係強化のため、都心利用者から求められる「文化と賑わい軸の強化」の視点から、開発コンセプトを提案しました。着眼点は裏宅地の活用と従来都市軸か

ら45°ずれた都心クロス交流軸の創造が当初提案のネライです。

バブルの最中に収益還元の発想を持つ

計画実現への事業組立と民活による賑わいづくりの効果を期待、名古屋の賃料限界に留意し、開発コストに高騰する地価（当時はバブルの最中）を反映させない収益還元発想から土地信託方式を選択、コンペ実現のためデベロッパー等の情報収集や長期経営試算をもとに計画を提案しました。コンペは2グループの参加があり、事業性とデザイン性などの評価から、標記グループが選ばれました。

ストックを活かした周辺環境への提案

隣接する矢場公園や周辺街路について、周辺地区との接続性や都心の付加価値化の視点から公共空間デザインのあり方を検討、行政と地域の方々との議論の素材を提案しました。

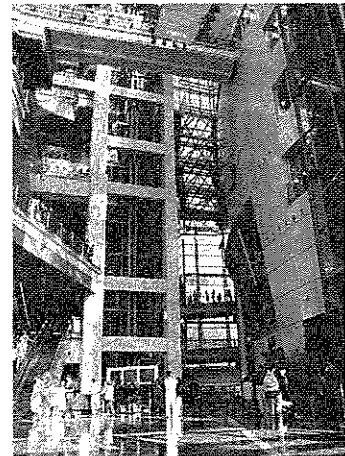
例えば既存樹木を活用した既設公園の改良や、歩道幅員を確保するため、一方通行を活かし、交差点部で歩道を膨らませる手法など幾つかの提案を行いました。これも当初提案と完成後とは異なるものの、当初の骨格的考え方がある程度活かされています。ビル来訪の折りに、お気づき頂ければ幸いです。

ビル内の検証は今後の課題

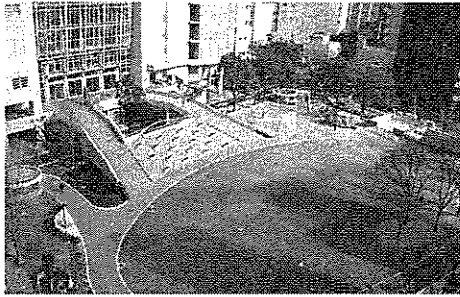
実は移転後の整理に追われてビル内外とも



南側外観
ビフrost-棟(右)と
ジyuden-棟(左)



ロフト&ビフrost-棟(右)と
ジyuden-棟の間のアトリ



ナディアパークとデッキで結ばれた矢場公園

にまだじっくりと観察出来ていないのが実情です。今後しばらく観察時間を頂戴し、改めてご報告させて頂きたいと思ひます。お近くにお越しの節は、気軽にお立ち寄り下さい。

(名古屋事務所 尾関 利勝)

“デカンショで暮らし隊”で探しあてた宝ものー都市計画キャパソ丹波大会に参画して
小阪 昌裕

どうなる100年後の丹波？

デカンショ、松茸、黒豆……これらから連想できる地域は、「丹波」でしょう。ここをフィールドに、「100年後の丹波を考える一次世代にどんな地域を残すか」といったテーマで、30余名の関西の若手を中心に4つの調査隊に分かれ、地域住民の方々と一緒に昨年春からフィールドワークを行い、私もその隊員の一員として参画しました。

わが故郷とつながった丹波

私のふるさと京都には、歴史的に丹波との関わりを示す「丹波口」や「丹波橋」という鉄道駅名があります。また、私自身、学生時代には自転車^{ママチャリ}で丹波の篠山町をツーリングしたこともあり、今回の現地調査はなつかしいものとなりました。というのも、わがふるさとから篠山への公共交通機関でのアクセスは、大阪まわりともう一つは園部まわりがあり、今回の調査でインタビューを行った夏の“デ

カンショ祭り”の当日には、以前のツーリングコースである園部まわりのルート^{ママチャリ}を、鉄道と路線バスでたどることができたからです。

さらに、秋の篠山の“春日祭り”にも再度足を運んでみましたが、この祭りは祇園祭の雰囲気があり、各町の“山”の運行等にも京都の方角が加味されているらしく、改めてわがふるさととのつながりを実感した次第です。

“丹波のオキテづくり”をめざして

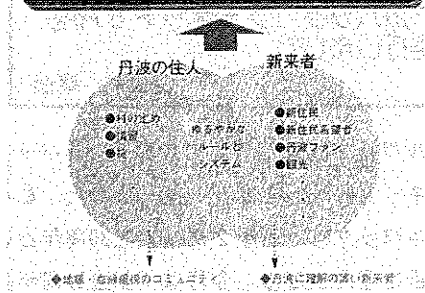
10年近く前に兵庫県の“丹波の森”構想づくりのお手伝いをさせていただき、丹波には親しみをおぼえると共に、何か大地の広がり^{ママチャリ}と長年の時の流れと人の温もりを感じました。今回も、その時とは私自身の丹波への関わりが少し異なるものの、春から夏、そして実りの秋のそれぞれの丹波を肌で感じることができました。

特に住民の方々との会話の中で印象に残った言葉といえば、「丹波における限りは、ちゃんと丹波を愛さんとあかんと思うね」「地域には、忘れられても構わへんものもありますが、ずっと大切にしたいものもあるんです」があげられ、これは、まさにデカンショの気風そのものでした。

この町に伝わる祭りや音頭の名称であるデカンショという言葉の語源は、篠山地方の方言である「デゴザンショ」や酒造りに行く丹波杜氏の百日ばたらきの「デカセギショウ」、明治時代に元篠山藩士の子弟が一高水泳部の部員に伝授した“デッコンショ節”を同部員がデカルト・カント・ショーペンハウエルの三哲人をもじり「デカンショ」としたなど様々な説があります。

つまりデカンショは、丹波に暮らししてきた人々の生活の営み、精神、文化風土そのものを表現するものであることにわが調査隊は気付いたのです。そこで、わが調査隊の名前も

新たなコミュニティ「治縁」づくり



わが調査隊の提案：大会発表資料より

(11月16日、丹波の森公園：兵庫県柏原町)

“デカンショで暮らし隊”と命名したわけ
です。

隊員全員が主役で本音での発表

わが調査隊の隊員は、年齢の中もあり、男女ほぼ半数ずつの9人、ふるさとも都会派から地方派までバラエティに富んだメンバーです。我々の提案は、丹波の将来には在来の住人と新来者との間でゆるやかなルールとシステムづくりにより、新たな「治縁」(オキテ)づくりを今から模索し始めようというものです。

大会当日は、地元の方々との懇談会やデカンショ祭り現場での突撃インタビューの模様を盛り込み、語りとスライドと音響演出により、生(ライブ)感覚の発表をねらいました。「都市の画一化についての問題提起」からはじまり、「丹波のオキテは“デカンショ精神”から……“デカンショ精神”は100年後の理想の丹波をつくる！」で締めました。

フィールドワークで得た宝もの

今回のフィールドワークで得たものは、丹波の住民の方と本音の話ができ、大地に少しでもとけ込めたような実感を持てたことです。これは旅行でも、仕事でも得られない心地良いものでした。また、今回のキャラバン隊のフィールドワークを通じて知り会えた多種同業者の“丹波キャラバン同級生”の方々と業務を越えた情報交換等のお付き合いができ、

業界内での自分自身と同世代の横のつながりというものが芽生え、今後もこれらを自分自身の宝ものにしていきたいと思っております。

最後になりましたが、お世話になった地元の方々このような場を提供していただいた日本都市計画家協会、(財)丹波の森協会等の方々に感謝致します。

(大阪事務所 こさか まさひろ)

木が動く!?
Trans Plantation Machine 工法
中川 天晃

Trans Plantation Machine (TPM) 工法とは、兵庫県三木市の馬事公園の現場で行われている新木の移植工法で、木をそのまま移動させて植付けが完了してしまいます。

従来の移植工法は、根回し、掘取り、移植(埋戻)といったプロセスを経て、完了します。

この場合、掘取りに至るまでの根回しの作業が難しく、樹種や木の状況によっては、1年程度の養生期間が必要なこともあり、移植工法のネックとなっておりました。

ところが、このTPM工法は計画地内の自然に生育する植栽を根回しを行わずに、いきなり写真1のような特殊重機で掘取り、そのまま移植先に直植してしまうのです。

写真2～4で見ていただくように、高さで20メートル程度の高木(コナラ)を平気で数



写真1：特殊重機による掘取り



写真2：特殊重機による運搬の様子

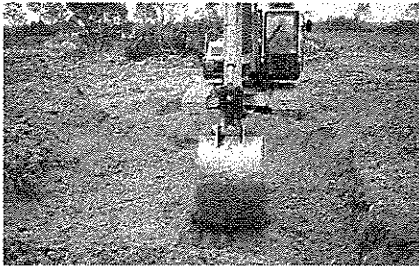


写真3：移植先をユンボで掘削する



写真4：位置を修整しながら埋戻す
(写真提供：石勝エクステリア)

百メートル先の移植先までトコトコ運搬して植付けてしまい、一連の作業は1時間弱で完了してしまいます。

現場を移動する大木を目の当たりにすると、かなりの迫力がありまた、先程までそこにあった大木が、あっという間に移植されてしまうのには驚きです。

実際の活着率は90%以上とのことですが、大木自身にとってはかなり迷惑な状況なのではないかと思う反面、切られて焼却されてしまうよりは自然に優しい工法ではないかと、ちょっと複雑な心境であります。

(大阪事務所 (三木山HGPJV現場監理事務所) なかがわ てんこう)

アルパック プラネット6号を 発行しました

金井 萬造

アルパック技術交流誌である『アルパックプラネット6号』を発行いたしました。私どもアルパックは、当年2月に創立30周年という節目を迎えるため、今号は「創立30周年記念号」として心新たに決意を固め発行いたしました。

特集テーマを『人・まち・文化』と題し、文芸・演劇評論家の河内厚郎さんへのインタビューでは、具体的な文化活動のあり方を伺いました。また、まちづくりと文化についての座談会も掲載しております。その他にも業務を通じてのアルパックからの技術情報の発信などを掲載しております。

私どもは、これからもよりよい仕事に努めるとともに、皆様方のおつきあいを大切にしながら、励んでまいりたいと考えております。ご多忙のこととは存じますが、ご愛読いただければ幸いです。今後とも、皆様方のご支援とご指導のほどをよろしくお願い申し上げます。



ご希望の方は申込用紙と240円切手を同封の上、ご送付下さいますようお願い申し上げます。

(代表取締役社長 かない まんぞう)

新刊日刊書評紹介

ベルナール・ウエルベル著

ジャンニ・コミュニケーションズ発行

『蟻』

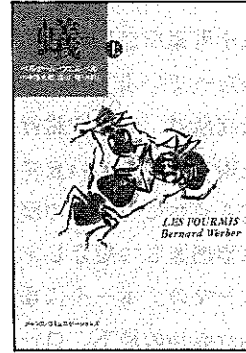
紹介 高橋 はるみ

表題のとおり、本書はアリが主役の小説です。アリの生態に基づいた小説ですが、SF（何故か昔のSFに登場する火星人は、アリやクラゲの巨大化したものが多かった）やファーブル昆虫記のような純然たる読み物ではありません。

本書は、三つの柱から成っています。まず、アリの世界。赤アリの都市とそこに住む数々のアリや、それに関する昆虫達。次に、「何があっても絶対に、地下室に行ってはならない！」という手紙と共に相続した家の地下に、次々と消えていく人達。そして最後に、先程の手紙と家を残したエドモンの著書【相対的かつ絶対的知識のエンサイクロペディア】からの抜粋。この三つが、数ページごとに繰り返されていきます。といっても、戸惑うのは最初だけですぐに、この方程式に慣れていきます。

さて、アリです。アリは、人間と同じように社会的生物です。ただ、人間より遙以前にその知恵と社会を持ち（創世記、数億年前）人間社会より徹底的に分業システムを発達させています。アリは大きく分けて、有性アリ（オス、メスの生殖機能を持つアリ。他は全て無性）、兵隊アリ、働きアリに分かれ、これらがさらに、農業アリ、砲兵アリ等に細分化しています。

この小説では、雄アリ（遠征隊の生き残りで、秘密兵器の謎を求めて孤独な戦いを決意する）、雌アリ（雄アリに協力）、兵隊アリ（雄アリに協力。地の果てへの旅に出る）の各一匹ずつが主役で、これに「岩の匂のするアリ」が、秘密を抹殺すべく送り込まれてき



ます。（繰り返しますが、SFではありません）他にも、赤アリの各カーストのアリ達（番兵アリ、傭兵アリ、乳母アリ等々）の様子や、赤アリの婚礼飛行や他のアリとの戦いが、描かれています。多少、脚色が加えられていますが、アリの生態がリアルに、且つ楽しく表現されています。

現在アリは世界中に分布しています。犬や猫に触った事がない人はいるでしょう。けれど、子供の頃アリの行進を見て、その先に手をおいて、アリが指を越していく体験をしなかった人は、先ずいないと思います。人間の生活のすぐ側にいる、この小さな隣人の世界が、これほど優れている事に驚かされます。

作者曰く『私を魅了してやまないもの、それはあのアリの巣だけである』。上下巻二冊ですが、続巻として、「蟻の時代」上下も発売されています。

付け足しになりましたが、最後に人間の方の話を。本に登場する人物は次々と地下へ消えていきます。けれど地下に降りていくには、次の問題が解けないと扉が開きません。『6本のマッチで4つの正三角形をつくるには？』

（京都事務所 たかはし はるみ）

まちかど

文化遺産の保全・修復・活用

三輪 泰司

近頃、酒蔵や町家を活用した居酒屋などが、バカ当りに当たっています。小樽の北海道地域計画建築研究所は、倉庫や銀行を改装する保全修復の技術を蓄積しています。

イタリアはさすがに桁違いの歴史です。

そのような事例を3つ紹介しましょう。

写真1はローマのナポーナ広場近くのレストランDa Pancrazioの地下。ローマ時代の遺跡をそのまま使っています。3年続けて行っていますが、どこまでが本来のものか、所有権はどうなっているのか、確かめていません。

図1はシチリアの州都パレルモの東にあるバロックの町、バゲリアの館。貴族の屋敷ですが、今は中庭を囲んでコミュニティ・センターに使われ、館は集会所と日本でいう学童保育所になっています。広場から2階への階

段をスケッチしました。

写真2は同じくシチリア、トラパーニ。昔のままの塩田による塩づくりを保存しています。風車は海水を汲み上げるスクリュエの動力。内部は塩の博物館とレストランです。

このような施設には全て、何世紀の何という建物か、設計者も、黄色いプレートで表示しています。写真3はバゲリアの例。

利用の仕方は、政府や学会のオフィス、観光案内所からブティックまで、多彩多様です。

調査・研究と保存指定までは行き届いていますが、修復はあまり進んでいないようです。先ず、守ることが第一。我が国もフロー経済のスクラップ・アンド・ビルド型建設からストック経済、修復技術への転換期です。

イタリア共和国憲法・基本原則第9条にはこうあります。「共和国は、文化の発展ならびに科学のおよび技術的研究を推進する。共和国は、国の風景ならびに歴史のおよび芸術的家産を保護する」(岩波文庫・宮沢俊議訳)

(取締役会長 みわ ひろし)



写真 1



写真 3

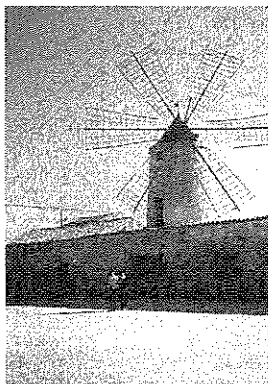


写真 2



図 1

アルパック (株) 地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- 九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673